The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	特集について ： 「宗教・障害・共同体ー障害と共に生きることの宗教性ー」
Author(s)	板井, 正斉
Citation	宗教と社会貢献. 2018, 8(1), p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68254
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「宗教・障害・共同体―障害と共に生きることの宗教性―」

特集について

論文１
優生思想と「別のまなざし」―宗教・いのち・障害と共に生きること―
（安藤泰至）
論文２
社会福祉実践の現状におけるキリスト教スピリチュアリティの機能―「障害福祉ソーシャルワーカーの語り」より―
（深谷美枝）
論文３
市民社会における〈ラルシュ〉共同体運動の意義－「権利」と「祝祭」－
（寺戸淳子）
論文４
「社会モデル」の思想と宗教―共生する社会の構築に向けて―
（頼尊恒信）

本特集は、2017 年 9 月 16 日に行われた日本宗教学会第 76 回学術大会でのパネル「宗教・障害・共同体―障害と共に生きることの宗教性―」（代表者　安藤泰至）をもとに、あらためて発表者より本誌特集として投稿いただいた。パネルディスカッションの要旨は、『宗教研究』（91 巻別冊、152-159 頁、http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2018/01/vol_91.pdf）に収められているので、あわせてご覧いただきたい。ここではパネルでコメンテーターを務めた板井より、簡単に本特集へ至った経緯を紹介する。

今回のパネルは、２つの特徴を持つ。一つは、極めて現代的で社会的な事件をきっかけに含んでいる点だ。いうまでもなく 2016 年の相模原障害者施設殺傷事件である。未曾有の不幸に多くの人が衝撃を受け、また動揺した。パネルは、この事件の背景と事件をめぐるその後の言動についても、できる限り冷静に、それぞれの知見を重ね合うことから理解しようと試みた。

もう一つの特徴は、発表者構成の多様さだ。そもそも「宗教」と「障害」

をめぐるテーマは、個別の宗派・教団における教学的・歴史的考察を中心として、幅広くかつ現代的な視野で取り上げられてきたとは言い難い。その点において今回は、（障害）当事者、宗教者、支援者、研究者という立ち位置を重複させつつ、「いのち」「障害」「宗教」「共同体」をそれぞれのテーマあるいはフィールドとしてきた発表者による立体的な議論となった。

満員のフロアとともにパネルを終了できた後、より多くの人々へ議論を開くためにも本誌での特集を打診いただいた。幸い発表者全員より特集意図に賛同を得ることができた。しかしながら、パネルディスカッションという特性上、短時間での発題に留めていた内容を、個別の論文にまとめてもらうのは、執筆者をはじめ関係者に大変なご苦労をおかけした。

以上のような経緯を踏まえて今回の特集は、各論文が昨年のパネルを踏まえつつ、さらにもう一歩踏み込んで論じている。フロアで議論を交えた方には、より理解を深めていただけるとともに、初めて読まれる方にもわかりやすく議論の前提がまとめられている。

最後に事件から 1 年後の議論を、まもなく 2 年を迎えようとする時期に特集論文としてまとめられたことの意義は大きい。執筆者への感謝とともに、色褪せないテーマに対する本誌読者の積極的な議論にも期待したい。

なお、各論文タイトルは、パネル発表時から一部変更されている。

特集担当：板井正斉（皇學館大学准教授）